

文学教育の問題点

—レ・ミゼラブルのばあいを中心に—

杉原 宥

もくじ

- 1 はじめに
- 2 指導目標と単元構成
- 3 指導経過
- 4 まとめ
- 5 反省と今後の課題
- 6 おわりに

1 はじめに

ひとつの物語教材を指導するにあたって、わたくしは「いかにと
りくむべきか」「いかにとりくませるべきか」ということを考えつ
づけてきた。わたくしは昨年も、中学三年の国語を受け持ち、そし
て、今年も三年の国語を担任することになった。昨年は、ガルシン
の「信号」(三省堂版)今年はユゴーの「レ・ミゼラブル」(日本

書院版)にぶつかって、そのたびに考えてみた。しかし、わからな
いことばかりで進歩はなかった。わからないままをのべて、諸兄の
ご批判を乞いご指導をお願いしたい。

なお、対象としたクラスは三年B組(男二二、女一四)ホーム・
ルーム担任クラスである。

2 指導目標と単元構成

実践報告の対象となる「レ・ミゼラブル」を含む単元構成をみよ
う。日本書院の「国語」三の第五単元は

五 世界文芸の流れ

- 1 プロメテウスとバンドラ
- 2 レ・ミゼラブル
- 3 世界文芸の理解のために
となっている。

単元の目標として指導書にあげてあるものうち関係分を列挙

するとつぎのようである。

- 1 読んだものについて話す。
- 2 翻訳文（評論・小説）を味わう。
- 3 西洋文芸のもつ思想について、そのあらましを学ぶ。
- 4 読んだものについて感想をまとめて書く。
- 5 わたくしは以上の目標にのっとり、さらにこの作品に即した具体的目標を加えてみた。
- 6 主題をとらえ、修正をはじめとする登場人物の人生の生き方について考える。

3 指導経過

第一時限

<p>学習指導の展開</p> <p>導入 作者紹介 作品紹介—テキストに収録された部分と、その後。</p> <p>展開 1 黙読による自由読み あわせて、わからない語句などにラインをひく。 2 いままで読んだり、きいたことがあるか。 3 登場人物の整理。 4 つぎの予告</p>	<p>指導上の留意点</p> <p>あくまでも、どんな物語かをつかむのが目的であるから、ラインをつけるだけでどんどん読ませる。</p>
---	---

本時においては、黙読によってこの物語の相をつかむことを目的とする。したがって、わからない語句があっても調べることはしない。いっきに、おしまいで読みとおしたい。

第二時限

<p>指名して通読</p> <p>感想をかく↓提出</p>	<p>中以上によく読める生徒に指名</p> <p>読みおえたら、感想をかかせることを予告する。</p>
-------------------------------	---

前時限の作業でラインをつけた漢字などの読みをたしかめつゝきく。以前にも述べたように、ここでも読みの確認にとどめて、くわしい意味の説明はさけた。この作品の部分は、とくに感動的なところであるから、その感動をそこなわないためにいっきに読む。また、きいているときは、鉛筆をもってあとの感想を書くのに役立つところにラインをつけることを指示する。（まとめ2 参照のこと）

提出された感想文を分類してみると、大きく二分することができ
る。
1 はじめてジャン・ヴァルジャンが司教の家をおとす部分
（資料A）
2 ジャン・ヴァルジャンが銀の食器を盗んでから 懲兵につかま
り、司教のところへつもれどされた部分。

第三時限

指名読み（前半のみ）

資料A配布

発問 感想文ではほとんど「自分なら追

い出しただろう」といつているの
に、司教はなぜいれたのだろう。

司教のことを追求し、それに対するジ
ャン・ヴァルジャンの心の変化をみる。

右の作業から、司教の人間像をうきばり
にする

ふたたびあらま
しを思いおこす
ために。

司教、ジャン・
ヴァルジャンの
言動に注意させ
る。

できるだけたく
さんきいてみる。

司教の博愛主義
をわからせる。

指名読みにはいる前に感想文について解説する。つまり、感想文
の焦点が二つにしばらく。そのことから本時では前半を扱う。

本時は、この作品の最初のヤマを扱うわけであるから、できるだけ
け多くの生徒に発言させる。なお、本時においては便宜上テキスト
の前半のみを扱った。しかし、まったく二分して前半を扱ったので
はなくして、全体の中における部分としてとりあげたつもりであ
る。

第四時限

指名読み（後半）

資料B配布

プリントとはな
れたものになら

発問 ジャン・ヴァルジャンはなぜ食器
を盗んだのだろう。

ないように。

発問 「あの銀の食器は、わたしどの
ものだったかね」という司教のこ
とばに対して、

とばに對して、

1 だれのものか。

2 同じようなことばは他にないか。

3 司教のどのような人からからそん
なことばがでたのか。

4 ジャン・ヴァルジャンが、盗みを
したあとに司教のところへつれて
こられなかったとしたら、どうな
っていただろう。

できるだけたく
さんきいてみる。

本時はやゝもするとテキストを忘れたものにしがちである。つね
にテキストとむすびついた国語の授業をしたい。

第五時限

M君の感想文の紹介（資料C）↓解説
指名による通説

M君の考えと自
分のとを比較さ
せる

主題についてまとめ
教師によるまとめ

中以下に説める
生徒も指名し
て、ゆっくり味
わいながら、た
しかめながら説
んでいく。

本單元においては、テーマ追求を中心とした感想文による授業を中心にしてきた。そのために、国語科としてやらなければならない問題のいくつかをばいしている。その補いをかねて、本時は質問の時間をとった。

4 まとめ

1 本年度のはじめ、わたくしは「国語科学習指導計画」なるものをたてた。その中で第三学年の目標として「物語教材などを材料にして『いかに生きるべきか』を考える」というのを加えておいた。いわば、その実践例としてこの「レ・ミゼラブル」にとっくんではないのである。「いかに生きるべきか」が指導者によるおしつけにならないようにし、学習者によって自覚されるようにつとめた。

2 最初この物語を扱う前に、わたくしは感想文を書かせてみようと思っていた。しかし、ただ「感想文を書いてみよう」というのはとりつきにくいし、また、期待するものも得られないと思って、つぎのようなヒントを与えてみた。

○もっとも自分の氣にいったこと。

○自分と比べて同じだと思ふこと、またはその反対。

○その他問題を感ずること。

黙読一回、指名による通読一回ののちに、以上のことを板書して感想文を書かせた。そしてその結果をまとめたのが資料ABCである。資料をみればはつきりするように、感想文は大きく二分することができる。(前出)資料Aはこの物語の前半のヤマであり、資料Bは後半のヤマである。A・Bの書かれた割合はほとんど同じである。Aは物語のいわば冒頭の部分で、学習者への印象が強烈であつ

たと考えられる。Bは後半のヤマであると同時に、この物語全体のヤマでもある。ここを指摘したということは、ある程度読みが深まっていると考えてよいであろう。

3 感想を書く前に、黙読と指名による通読を一回ずつ行なっている。最初の黙読においては、読めない漢字や、わかりにくい語句にしろしをつけ、そしてこの物語の相をつかむことを目的としている。つまり、この黙読は導入的役目を持っているのである。ついで、二回目の指名による通読は、比較的よく読める生徒に指名しての読みである。いっきに読み終えて物語からうける感動をそこなわないようにしたい。また、読みにはいる以前に、あとで感想を書いてもらうことを予告し、読みっぱなしにしない習慣をつけるとともに、作業の能率化をはかった。さらにさきにもべたとおり、ききながらわからない漢字などを確認することも注意しておいた。しかし、それ以上の追求はしないで、あくまで読みについていくという態度ですすんだ。

ただ、漢字、語句の指導がおしまいまで満足にできなかったことを残念に思っている。これらをどこでどのように行なうかは、今後に残された課題となつた。

4 ふだん家庭で読んだり図書館でみるとともおもしろい話が、国語の教科書にのせられて、国語の時間に習うとまったくおもしろくなくなるという話をきいたことがある。その原因のひとつとして、国語の授業では段落わけや漢字指導をすることをあげるのである。生徒たちは物語を読もうとするときには、そんな段落わけや漢字のつかいわけを習うことをきつとめんどうくさがっているにちがいない。いっきにおしまいまで読んでしまつて「おもしろかった」

「かわいそうだった」「ボクもあんなになりたい」と思いたいにちがいない。それを国語の授業では、途中で切ってポツポツ指導したり、漢字のつかいわけなどをしてなかなか先へ進んでくれないから、イライラし、おしまいはそれまで読んできた内容の印象もつずれ、その物語全体に対する興味もうすらいでしまうのだと思う。しかし、国語の時間にある物語を読んで「おもしろかった」だけで終わってはならない。そこまではいわば第一次の読みであって、第二次、第三次へと発展していくことが必要である。「どこがおもしろかったのか」「なぜおもしろいのか」「そのほかにはないか」「もしキミだったらどうするか」などの発問によって、より深くほりさげなくてはならない。指導者があちからこちからゆさぶってやる必要がある。教師はゆさぶるために力持ちでなければならぬ教材研究の必要なことはここにもみいだすことができる。

指導書などをみると、まずはじめに新出漢字の確認などと書いている。初めに確認をするというのであるが、どの程度の確認かに問題があると思う。その際に、使い方から類語まで説明するのか、ただ新出漢字として紹介するのか、指導者によってさまざまになされていると思う。わたくしは、適宜その場に応じて指導するのをとりたい。その漢字が実際に使われている場にそくして指導したい。倉沢栄吉氏のことばをかりると「文脈的指導」ということになる。5 さいごに、まとめに使ったM君の感想文(資料C)についてのべてみよう。M君はつぎのように言っている。銀の食器を盗んだジャン・ヴァルジャンが憲兵に連行されたときを境にして、以前と以後は別人のようである、と。このことばにわたくしは注目したい。それまでどの宿屋をたずねても、のら犬のように追いはらわれた

ジャン・ヴァルジャンは、自分の行く所はないのかと思案にされる。それは罪を犯したもののへの報いである。そこで、自分に「あきらめ」を感じるとともに、世の人に対するあきらめも感じていたであろう。それはまた「生きること」へのあきらめにもつながる。他の感想文にもみえるとおり「もし、ジャン・ヴァルジャンが閣下の家にあられなかったら、そのまま悪い人間ですごしたかもしれない。」この考え方は正しい。ひとつのきつかけによって、生きることをあきらめるか、あるいは、善人ですごすことをあきらめて生きつづけるか、である。まさに司教にであうまでのジャン・ヴァルジャンはそれであった。ひとときのパンを盗んだことから数々の罪をかさねていったジャン・ヴァルジャン、一個人に対する社会の圧迫の大きさ、ひいては当時の法の不備からぎりぎりのところまで追いつめられたジャン・ヴァルジャンの姿であった。それはそのまま、現実社会の欠陥を表わしているものといえよう。

5 反省と今後の課題

1 せっかく感想文を提出させたが、有機的に活用させるという点に欠けていたのではあるまいか。その解決が、「文学教育における感想文の取り扱い方」になろう。

2 感想文をまとめて二つの焦点にしばったが、的はずれのことをかいている生徒への指導がおろそかになっていた。これは教育という場においてみおとしてはならない問題である。

3 教材研究がた然なかつた。自分が教えようとする教材に対する教材観々というか、そんなものがふたしかであつたので、このレポートも大きなまちがいをおかしているのではあるまいか。

6 おわりに

中学校の教師ということになって二年目をすごさんとするときにおつかった問題をとりあげて、わたくしなりにまとめたのがこのレポートである。ささやかなあまりにもささやかな経験からわりだしたものに、多くのまちがいがあることと思う。よろしくご指導をお願いします。

資料A

○司教はなぜかんごくから出たものを家に泊めてやったのだろう。それはイエス・キリストの家であつたからだろうか。

○わたしたちだったら、こんなきかない人が家に来たら追いかえしていただろう。

○ジャン・ヴァルジャンが戸を開いてはいつてきたときの司教の態度はりっぱだと思ふ。穏やかな心があつたために、ジャン・ヴァルジャンが化け物みたいな姿ではいつてきたときにも、わたしの兄弟としてやさしく迎えたのだろう。普通の人だったらやはり宿屋の人みたいに追い出すだろう。

○わたしが司教だったらそんなこと（自分が囚人だということ）をいうジャン・ヴァルジャンは追い出しただろう。しかし、わたしだつてそういう司教のことばぐらい言うことができます。が、この司教のように自分の行動に出るかが問題です。

○ジャン・ヴァルジャンが司教の家を訪問したときに、なぜ懲役人だとうちあげたのだろう。ボクがジャン・ヴァルジャンだったら、うちあげただろうか。たぶんうちあげなかつただろう。

○もし、わたしがジャン・ヴァルジャンだったら、もうすこし司教がわたしに対してあわれみをもつように話し、いいくあいに司教のきげんをとつたろう。ジャン・ヴァルジャンはそのことを勇氣をもつて言ったのか、人のなさをこうするためにいったのか、わたしはわからない。

資料B

○牧師はたいへん心のやさしい情ぶかい人。銀の食器が盗まれたとうつたえもしなく、ただあげたという。わたしだったらその晩、だいいなものを出さないかもしれない。

○ジャン・ヴァルジャンが銀の食器を盗んで憲兵につれてこられたとき、司教はおこるところか燭台も与えた。普通の人だったらジャン・ヴァルジャンをそのまま渡しただろう。もし、ジャン・ヴァルジャンが司教の家にあらわれなかつたら、そのまま悪い人間でこの世をすこしたかもしれない。

○司教はジャン・ヴァルジャンが危険な前科者でも、だいいな銀の食器を盗まれても、けっしておこつたりはしなかつた。もしわたしだったら憲兵にいいつけていたかもしれない。それを司教は「銀の食器は不幸な人にさしあげるのだ、ジャン・ヴァルジャンは不幸な

人だ」といってそれをやった。そして、やさしいことばまでかけてやった。わたしだったらひどいことばをかけて、もうとくに追いかえしていただろう。でもあとから思いかえしてみると、あんなひどいことばかりいって追いかえしていると、また悪人になっているかもしれない。司教のようにやさしくしてやると、もともとおりに生まれかわるだろう。

○親切にされていたのに、ジャン・ヴァルジャンはなぜ食器を盗んだのだらう。というのは今までの生活があまりにみすばらしいあわれな生活であったからではなからうか。わたしでもこんなときにはジャン・ヴァルジャンと同じ心でいるかもしれません。

資料 C

ミリエル僧正は一般俗人とはちがう、人間ではなく神様に近い人間ではなからうか。そして、ジャン・ヴァルジャンが憲兵に連行された以後とその以前とは、月とスッポンほどちがう。以前のジャン・ヴァルジャンは自分を半ばあきらめている。そして金を人間の心以上に重宝がっていた。しかし、銀の器を盗んで連行されてからのジャン・ヴァルジャンの心は一八〇度回転した。ミリエル僧正の底なしの慈悲深い心に触れてまったくかわった。そして、ジャン・ヴァルジャンが死んだ時には、愛と平和が横たわっていた。

(37・10・3)

(広島県世羅中学校教諭)